



『人生を変えるドラッカー』

吉田麻子著

ダイヤモンド社 1500円十税



半世紀も前に「メディアはメッセージ」と言ったのはマーシャル・マクルーハンだが、ネットやSNSなどの情報メディアが氾濫する時代に一つ気づいたことがある。

それは「言葉」ほど人の脳を直接刺激しうるメディアはないということである。確かに、感じがよくてキャッチーなデザインとコピーがあれば、何となく人は見てくれる。けれども、本当に心の芯に到達しうるのは、精錬され、鍛え上げられた言葉である。

しかも、言葉のいいところは、古くなるようで古くならないところにある。プラトンやアリストテレスの言葉は今読んでも古くはない。松尾芭蕉や吉田兼好の言葉もしかりである。いや、むしろ古さというものが、いく時代ものフィルターをくぐり抜けかえって新鮮な響きをもって私たちの前に蘇って

くる印象さえある。近年のアドラー・ブームなどはまさしくそれである。

これは一つの物語である。しかも、物語として一つの世界を持ちながらも、同時にセルフマネジメントのみならず、私たちが生きる資本主義の世界への壮

物語の力

大な問いをうちに含んでいる。

評者は電車に乗ったときに読みはじめた。やがて途中駅から猛烈に混み始めた。本を持つ手が目のすぐ近くにきて、半ページの中に顔を差し入れるようなかっこうになったのに、読むのをやめることができなかつた。そして、降車するときに、読了していた。

やはりよい物語というものは

シンプルである。それは一度ページを開いたら最後のページをめくるまで本を閉じさせない力なのだ。だとするならば、この本はまさしくよい物語の持つえもいわれぬ吸引力を秘めているのは間違いない。

確かに一つのビジネス小説の体裁をとってはいる。働くものなら誰でも一度は悩んだことがあるテーマ——たとえば、時間がない、上司と合わない、結果が出ない、将来が不安——など

が扱われている。

もちろんそれらも興味深いのだが、それ以上に興味深いのは、——言葉にすると当たり前なのだが——人間観察なのだ。しばしば小説や物語は現実とは違うから読みたくないという人がいる。確かに間違っていない。小説はフィクションであって、ありていに言えば作り話だ。けれども、作り話だから

現実的でないというのはまったくの言いがかりである。反対である。むしろフィクションの中には、書き手の慎重で繊細な人間観察のみではなく、一つの世界観が凝縮的に表現されざるをえないからだ。

だからこそ、文学というジャンルはどんな時代であっても生き延びてきたし、今なお命脈を保っているのだらうと思う。そして、今文学のなかでもひとときを中心的な位置にあるのが小説なのもまた事実である。

はてしない平原をわたる一陣の自由な風のような、古い井戸から今汲み上げられた清冽な水のような、やさしくアコースティックな読後感をこの物語は保証してくれる。ふつうのビジネス書では残念ながら手にすることのできない体験である。この世界ではジャンルの壁もない。あるのはよい物語であるかどうかだけである。ドラッカーもゲーテも同じ世界の住人なのである。